

八百屋お七

上之卷

木の端―法師を
無用な木の端に
譬ふる事枕草紙
に見ゆ
まいち戸―横に
細長きサンの有
る戸
こい茶―戀と涙
にかく次の新茶
の口を切ると初
にいふとかく
玉ぼこ―道の枕
詞、給ふとかく
ていやつて―し
なつくつて

誦下クセ 木の端はしと誰たが片意かたい地な筆ふでずさみ、それは浮世うきよを捨坊主すてぼうず、是こゝは煩惱菩提ぼんなんぼだい所の、寺は
華麗くわれいの大書院おほしよらん、唐戸からどまいら戸違ぢがひだ棚、掃はきちぎつたる烏帯さうだい、塵ちりに交まじれど法性ほうしやうの、水は濁にごら
ぬ瀧川たきはの、戀こひに小性こしやうの吉三郎きちさぶろう、遊びあそびがてらに挽ひく茶臼ちやうす、眠ねたからふと人目ひとめには、見みへて
寐ねもせぬ憂うれひことに、花はなの姿すがたも萎しれ行ゆく、君きみをこい茶ちやに口切くちきりの、主ぬしは誰様たれさまお七さま。立つ名
はけにも本郷ほんかうの、八百屋やの花柚松茸はなゆまつらひの、蒼つばきも何なんれ初物はつものの、縁えんは可笑をかしや假初かまゐの、過すぎし火難くわなん
に此寺このでうへ、親子おやこ主從しうじう厄介やくかいの、内うちのもやゝ氣きも付つかず、普請ふしんも出来できて鴛鴦うしやうの、つがい
れなき水離みづはなれ、立たつても居ゐてもあらねば、せめてお顔かほを拜をがみにと、親おやの跡追あとおう寺參てらまゐり、釋しや
迦かも見許みゆるし王たまほこの、道みちのかいどろおしおろし、襟褰えりつかろふてていやつて、座敷ざしきへ出でれば君
が顔かほ、見るよりはつと氣上きのはりし、お七お七ノウ杉すぎや、もふおじや。なんとなんといぬまいか」と、髪かみ

ねらがいい願ひ
のなまり、ねら
ふにかく
あたふた―急忙
てちだ―手傳は
うかへ

とめ袖―とめ
るにかく

誓文くされ―神
佛に誓つて

をいらいつ手を撫でつ、もぢくするもどかしく、杉ハテまあ初心な何ぞいの。親御
は後生ねらがいに、御前は小性ねらがいに、あたふたと取急ぎ、こんな尊いしゆびへ來
て、あかりの戀が始ても、何が恥かしござんす」と、背をついとおしやられ、倒けかよる
のを機にして、とんと後へもたれ寄り、てちだをかへと手を取れば、吉三郎振り回り、「ハ
アハお七様お久しや。道も忘れず今日の御參詣は奇特なり。然し御親父久兵衛様お袋様
は二時も、先から參つてござるのに、跡へ下つて何ぞ又、あじな趣向があつた物。聞ば
毎日堺丁、木挽丁への御遊山に、歌舞伎若衆の美しい、姿でうまい狂言を、御覽じた
目で私などが、抹香計とめ袖に、秋の來たのは御尤。戀のいろはを教へても、手が惡る
ければお師匠を、替へて嫁入遊ばすけな。日出度事じや」と氣を持たす。お七はさすが
正直の、顔を赤めて涙ぐみ、「誓文くされ何時からか、芝居へ足も向けませず、心に立て
お猫さへ、膝に抱いたる事もない。此方様こそは方々から、女子の弟子がついたやら。
ちつとの内に大人びて、小面の憎い此口が、私は因果で可愛いもの。何處へ嫁入をする
ものぞ。お前はやがて坊様に、成らしやんすとの取沙汰が、氣掛りでならぬ故、互の固
めせふ爲に、これ起請をと差出す。吉三はやがて戴いて、「忝ないく。兎や角云たは

常香云々―常香
盤に香を盛り終
らずに
曼陀羅―淨土眞
相の圖

淨土の一枚を請
―法然上人の作
ころは二人かは
らぬ起請に用ふ

琉球芋―今の甘
諸
こま付―手なづ
けられず
できまして―よ
くいはれた

皆僞り。誠を見する誓紙をば、只今致て進ぜふ」と、棚より料紙硯箱、筆おつ取て書く
所へ、新發意常香盛りさして、後の方を立覗き、「コレ吉三様何さしやる。上人様の曼陀
羅を遊ばす筆で、勿躰ない穢らはしい」と尤められ、はつと下にさし置いて、言「ハア辨長、
其方は先からそこに居て、様子は何も聞きやらぬか。お七様のおつしやるは、曼陀羅が
欲しけれど、お師匠様へは憚りな、身共にとのお望故、書ふとしたが何とした」辨「エ、
如何にもそんな事そふなが、お七様から遣らしやつたは、淨土の一枚起請とやら、有難
そふに戴いて、こなたは宗旨替へる氣か。曼陀羅書くとおしやれども、そりやあんだら」
と笑ひける。お七はやがて手を取て、「いつ見てもく、可愛らしい坊様じや。巾著でも
紙入でも、欲しくば縫ふて進じよぞや。ちよつと見たこと聞た事、いはぬ物じや」と賺
ぜ共、中々頭打叩き、辨「愚僧今年十二才、出家の道を相守つて、女の手から物とれば、
五百生が其間、手のない者に生れます。又嘔吐けば獄卒が、かねの剪刀で舌を抜く。そ
れでは日比好物な、琉球芋が食はれぬ」と、こま付られず立去らず、取付く虫の辨長や、
花の嵐と持餘す。杉は捕まへ「できました。日に入様な御前でも、出家侍佛の使者、
位の高いお人じやが、それでも爰へたつた今、幽霊が出ましたら、恐ろしがつて泣かし

ねつな事―ねつはこれる
八官―法華經の卷の數八卷にか
く
びくにん云々―比丘尼の死骸が夫きく棺桶に夫きく比丘の唄ふ拍子の「少觀くわんにかく九太―比丘尼の一名と丸き材とかく
ぞんだつざい云云―十界の作業迷悟の根原に深く達する深達罪福相偏照於十方（法華經）
ふるなの辨長―富樓那の辯にかせつき―節季と赤鬼
身體云々―身代に穴をあけるくき桶―澤庵漬の桶

やろがの「辨」ハアねつな事をばいやるのふ。其幽靈を浮めてやる、胸に納めた法華經の、八官町のびくにんの、ちと棺桶の詰つたが、迷となつて幽靈が、そこな丸太の間から、出たをぢんだつざい福相、浮めてやつた」と意氣過ぎた、習はぬ經の談義口、悉皆ふるなの「辨」辨長様、是から私が咄そふ」と、膝に抱寄せ「聞かしやんせ。こちの隣に分限者の、造り倒れがあつたけな。男は去年の正月に、初の子産んで死なれたけな。跡で後家御が奢られて、傾城狂を爲られたけな。揚錢の見入にて、せつきといふ鬼になり、慾に眼が光るやら、身體に尾が見ゆるやら、額に江口倉橋の、大根程な角生へたを、くき桶に入れ其家の、はしりの側にうづんだけな。其執心で夜々は、屋鳴震動雷電し、天井板がむちくくく、はしのこがぐはたくくく、四方の壁がどろくくく」辨「モウ此咄措いて給も。どふやら面白なさそふな」杉「ハテまあ跡を聞かしやんせ。又膳棚がぐはらくくく、庭の薄がざはくくく、明障子がほうつと燃へ、其中から幽靈が、しろ佛程けはふての、おはぐろは烏羽色、髪うつさばき倒に、屏風の陰によつこりと、顔さし出してけらくくく、ハ、くくくハット笑ふたけな。家内の者が一時は、ワ、ワ、くくワット目を廻せば」小坊主は狼狽へて、彼處へ向けば「向ふから又其顔が出る。

はしり―流し
けはふて―假粧
ひて
風呂敷の云々―
吉三の小袖を風
呂敷の代りに
顔に起請―顔に
著せるにかく
書院―しやうに
かく
裾縁―戀にかく
如是本末―如是
は經の最初の句
にして徹頭徹尾
の意に用ふ

めかり―目利

めんないちどり
―めくら鬼の遊

こちらへ寄れば後から、毛の生へた手で投廻す。あをぬけば二階から、俯けば簀から、「是
はならぬ」と逆廻り、吉三が袖に顔差入、法蓮華經も本道も、付ふ藥のない首尾を、杉が
氣轉の手療治に、引抱へ來て風呂敷の、小袖を取て辨長が、顔に起請をはやくと、まづ
良い事を書院先、硯を取てくれえんより、濡縁有こそ嬉けれ。互に向ふ顔と顔、彼方に
抱けば此方にも、恐ろしがりて抱付いて、お題目よりお經より、如是本末や屈竟の、子
供をだます方便ほん。膝の間より坊主首、によつと出して「見たくく、おりや見付
た」と駈寄るを、杉も續いて走寄。「其處を彼の幽靈が後より引摑み、なふ怨めしやそち
故に、多くの屋内が世話を焼く。小意氣過ぎたる小坊主奴と、まつこのやうに抱へ帶、
くるくく」と目を巻きて、執念き聲で、やい其處な、二人の者はうつかりと、何狼狽
へて立て居る。そちらではない此方へじや。ハアテ彼方へ。めかりのない。帶解く事も時
による。ついちよこくとねる物」と、氣を付られて領いて、飛石傳やうくと、圍の
内へ内ければ、「さあしすました幽靈も、最早冥途へ歸る」とて、搔消すやうに丈方へ
逆て形は無かりけり。辨長獨うろくと、「杉こりや何とする事ぞ。めんないちどりが
合點じや」と、座敷一間を舞歩き、「吉三殿お七様、杉々々」と呼ばへども、返辭無けれ

はめた一駄いた

つがもない一わけもない

よみ博奕
にくずし一ぶち
こわし

ば鉢巻を、そつと外して「こりやどふじや」と、四邊を見廻し打領き、起請を出して押戴き、「一杯はめたと思やろが、其裏喰はせ此方には、吉三の袖の内には有、これしてやつた。良い氣味じや」と、打笑ふたる後には、萬屋武兵衛太左衛門、先より様子を聞濟まし、「新發意爰に何してじや」辨「エ、お二人様お参りか。久兵衛様も先から、客殿にござります。お出」と云て駈行を、武「ア、是辨長殿、此方が只今戴いた文を、身共に下されい」辨「ハテつがもない事計。忝も是はな、お七様と吉三郎、戀慕れよつの起請とやら。お前もらふて何さしやる」武「サア其お七と吉三奴が起請じや故に、もらひたい。其替には常々に、欲いくといはれたる、木佛の大黒と布袋や、加留多一めんじやが、何と」と背を叩かれて、辨「こりや談合が面白いが、だまくはすのじやござらぬかや」太「ハテ何の嘘をば吐く物ぞ、則太左が請合じや」「ム、歴々の證據人。そんなら遣ろ」と差出せば、武兵衛悦び請取て、「是さへあれば、此方の戀は叶ふた」太「手に入た」と、兩人呟き入にけり。辨長は只一筋に、「武兵衛様必ずや、明日共いはす晩からは、六介が部屋へ行て、二文四文のよみ打て、釋迦に契を結ぶ」の神、お七が戀のにくずしと、知らぬ事こそ三重悲しけれ。主従の縁はさすがふか編笠、用有氣なる侍の、玄關に佇みて、

「頼みませふ」と云入る。折節住持は方丈へ、吉三件ひ出給ひ、「何人成ぞ用あらば、此方へ」と有けるに、「ハッ」ト答へて編笠を、取て彼處に入れれば、雫ヤア十内殿お久しい先申さふ。御主人には、不慮成事の御浪人、殘心推量仕つた。吉三は親子の中なれば、さぞ歎かふと存たに、さすがは學文精にいれ、出家に染る程有て、世界は無常とあきらめて、頓著も致さぬ段、去とは奇特に存ル」と、取なしあれば十内は、「滿悅至極の御詞、それと申も上人の、日比お示しあるいはれ。就いては主人源次兵衛、浪人せしは何故と、お耳へ入しは知らね共、自分にをいて一合も、非道の沙汰は致さね共、若殿の御難義を、救い申さん爲計。私慾の科を身に被り、不時の虚名を請たる事、さらく悔候らはず。それに付ても吉三郎、出家の願ひをひたすに、貴僧様へ申上、剃髮禪衣の姿をば、篤と見届立歸れ、と拙者を差越候」と、慇懃に相述る。上人暫し領いて、「苦勞の中にもそれ程に、子は大切な物じやよのふ。成程々々今日にも、出家致させ申さふ」と、頼もしけなる返答を、胸に手を置く吉三郎、兎や角思ひ廻らして、眞中へすつと出、吉ム、珍らしや十内。扱某が出家の事、御師匠仰有通り、心以待兼居つたるが、今其方が咄を聞、忽ち心底ひるがへり、二度武士に成思案、先一通り承はれ。父源次兵衛、若殿への忠義

に浪人致せしを、若殿御満足に思召、御身持直れば浪人せしかいあらん。然れ共此趣
 大殿御存無き時は、親たる人仇奉公をした道理、本國へ立歸り、隠れし忠義を顯す事、
 今日遁世致すより、拔群の孝行」と、詞飾るも好色の、嘘に馴れたる證なれ。十内涙を
 袖に受け、「おほくの書物を見ひろけて、深き道理を思召す、御所存感じ入たるが、武士
 の作法は外の事、主の善惡顧みず、討死するも世の習、そこは差別はない所。お前が奉
 公お望でも、不届者の盼とて、親殿御抱なされまい。申開もならぬ筈、すゞく歸給
 ふのは、恥に上塗する同前。よくくおほし直されよ」と、理を正せ共、言イヤくく、
 身共が勘當受たのは、大殿も御存有、さあれば親とは他人なり。其他人の某が奉公望
 が誤りか。何の遠慮有べき」と、いはせも果す。二是吉三様、勘當を言立に、御奉公あ
 る此方なら、孝行顔もいらぬ物。ア、どふやらお前の御胸中、紛らはしうて飲込まれぬ。
 是も非もいらぬ發心を、さあ爲さるゝか爲されぬか。返答次第拙者奴が、分別有一とに
 じり寄る。上人は聲を上、「ア、氣が短い十内殿。武道のしぎは其許に、いか様共捌かれ
 い。法師の道は此方へ、預置かるゝ筈の事。數ならね共師と頼む、愚僧が指揮致す義を、
 吉三も否とは申まい。世話をやかすと緩りつと、心靜めて語らしやれ。こりやく辨長

ひじ—非事に前
中の食事

だいそれた—飛
いてもない

茶持來い。ひじも拵へ荳盆」酒よ銚子よさんぐの、中に立たる御師匠の、心遣ぞ殊勝なる。然る折節方丈より、八百屋久兵衛親子連、續いて武兵衛太左衛門、住持の前に會釋して「お暇申」と立出る。雫エ、こりや早御歸りか。最前より此に居て、御挨拶もせなんだ故、武兵衛殿や太左殿は、定めて酒が足りりますまい。お客も心安い仁、よふござるはい遊ばしやれ。平にく」と留むれば、兩人は立留り、久兵衛殿聞かしやつたか、御遠慮の無い御方と有。然らば序に今の事、お寺へ御咄致ませう」久ハテ武兵衛殿それはまあ今日に限らぬ事、唄や娘も連れたれば、暮れぬ内にいにたいが、ござれ」と云もさらぬ顔、是非なく共に立戻る。兩人は上人の膝元に畏り、「御酒は望に候はぬが、急にお知らせ申たき、いはくは是なる吉三郎、親御は名有武士とやら、承ればだいそれた事仕出して、此頃追放せられた共、縛首を討れた共、口々の取沙汰故、親の子なれば如何様の、義がござらふも知れませぬ。片時も早く暇をば、遣はされたらよからふと、憚ながら存ます」雫ハア、心遣は忝し。先だつて其事は、愚僧も聞いていまするが、世間の沙汰とは裏表、様子は分ていはれぬ義、苦勞に思ふて下さるな」「ハ、くく、否それはお寺へ遠慮して、取合せ云最良口、其横著さ非道さは、聞も身の毛のよだつ事。吉

且方―檀那方

すつはのかは―
無驚

三は不便に思へ共、お寺には替へませぬ。云ても御合點ないならば、無理に吉三を引出
 ぞと、太左と身共兩人が、牒し合せて置ました。サア吉三立て行け」と、傍若無人罵れ
 ば、住持顔色損じつゝ、「兩人存外千萬な。出家の弟子は子も同然、其吉三郎を我儘な
 雑言は何事ぞ。難義が懸りや師弟共、此寺を開く分。其方の世話にや爲ますまい。お手
 前計が且方か、不出來な差配」と叱られて、武エ、何にも御存ない故に、御最眞が一が
 いな。お前は弟子と思そふが、お七と云てあれに居る、娘が吉三のお内義様、坊主の女
 房」と冷笑ふ。久兵衛夫婦腹を立、「そりや武兵衛殿何言やる。大事の娘を吉三には、誰
 が仲人で嫁つたぞ。龜相な事はおしやるまい、證據を見よ」と立かゝる。武はて喧まし
 う云はいでも、こちからお目にかける」とて、件の起請取出し、「コレ讀みまする、聞かつ
 しやれ。其方様に御出家を止めさすからは、此方にも嫁入致し候まじ。次に色々神お
 ろし。よし様參る、お七より。何と」と云を聞よりも、吉三は袂打振り、はつと計の風情な
 り。お七はおろく涙ぐむ、景色も何れ笑止なり。久兵衛目鼻を顰め、つくぐと打ま
 もり、疊を叩き身を慄はし、「やい其處な徒者、何時の間にまあ此様な、大膽な義を仕
 出して、大勢の眞中で、親に面恥かよせおる。すつはのかはな若衆が、此久兵衛が僅成

いたいけー愛く
るしい

家一軒を見込にて、仕掛けた戀に乗せられたな。大白痴奴盗人奴」と、彼方を睨み此方をば、引摺寄せてさんぐに、打るゝ杖の下よりも、お七は吉三を打見遣り、吉三は爰に居ながらに、消へも失せたき心なり。住持はしばし黙然と、涙を隠し居られしが、稍あつて、雫是御夫婦、全くお七に科もなく、吉三が徒したでもなし、科人は此坊主。お七が爰に居られし節、はれいたいたいけな發明な、娘の子じやと思ふから、戲言を二三度も、申た事の候が、女は何處やら愚にて、まん誠かと某へ、送ふとがな思ふたを、しどけなふして拾はれて、無き名負ふたる不便や」と、衣に落つる涙こそ、二人が袖にわかるらし。武兵衛はせいて大胡座、「是御寺様、御最眞が餘り過てむつとする。應を驚となされうが、起請の文字ははがされまい。是御覽ぜ」と投出す。雫いや見る迄もないお手前が、最前讀んだ文言に、其方様に御出家を、止めさすからとはなかつたか。吉三は出家じやおじやらぬぞ。宛名に書しよし様は、愚僧は勿論吉祥寺、何と擬は有まい」と、眞顔造つた諍ひに、何れ誠と分き兼ねて、皆々興をぞ覺ましける。武兵衛住持を睨付けて、「これ御坊、女房狂を爲さるなら、魚も定て參るであらふ。幸道で求めたる、玉子を是に持合す。お饗應を申さふ」と、袖の内より取出し盃に打入て、「サアお寺様、

迄―強辭にて意
なし
おんでもない事
云々―勿論の事
ぢやあがりな
さい

げんぎ―玄義か

玉子酒一つ参れ」と突付る。雫「何じや、身共に是呑めか」武「いかにもお七同前の、八百屋の玉子まいる氣か、参らぬ氣かで眞實の、底を洗ふて見る合點」雫「ハテ疑ひ深い男じやなふ。佛祖をかけてお七への、戀は偽なけれ共、邪淫は思案の外の事、殺生戒はる破るまい」武「イヤ〜〜〜何程佛祖をかけられても、是を呑みやらにやいつ迄も、吉三が垢は脱けられまい」雫「ム、すりや是非共に呑めじや迄」武「おんでもない事。聞こしめせ」雫「ハテ扱々々是非もない。ハア實に昔もためし有、鳩のはかりに身をかへし、佛の慈悲の古も、愚僧が今も菩薩の行。此酒則清淨池。吉三が垢さへ脱けるなら、呑んで見せう」と引受て、手に持初むる盃の、朱を注いだる血眼に、涙は霞の如くにて、「武兵衛餘り慘いぞや。久兵衛夫婦は大切な、娘に浮名立られし、其腹立に如何様な、無理無體も云筈じやが、寺檀の好によしなにも取合有筈を、難題いはるよお手前が、胸の中に物が有。探して見たい物なれ共、法師の身なりや是非がない。拙僧既に父母の家を離れて七才より、佛の前に受戒して、難行苦行師の苛責、誠に出家の文字の様、住家と定む宿もなく、雨露霜雪に身を痛め、此に馴るれば彼處へ行、有時は飢に疲れ、けんぎ文句に眼を曝し、四十有餘の此比は、色衣を著し敬も、一字の寺を司り、聖人共

いらんの林云々
—伊蘭にて臭き
木梅檀は香木
七字の首題—南
無妙法蓮華經の
も題目

緩急—横著

云るゝ身に、玉子酒を飲まそふとは。身共が無間へ落つるなら、お手前は叫喚の、苦を請ふのが不便なはい。と云て吞まずば聞かれまい。いらんの林に交れ共、しやく旃檀の香は失せず、泥より出て泥ならぬ、胸の蓮は宗門の、七字の首題只今の、妙法蓮華」と一息に、すつと干さんと爲給ふを、十内手を上「待つたく、待ませふぞや待ふく」と、盃取て彼處へ投げ、吉三郎を取て伏せ、拳を振上遠慮なく、さんぐに打ければ、吉「ヤア家來の身にて推參な」と、一腰抜かんとする所を、隙間あらせず二つ三つ、足の下に蹈付て、「何が推參緩急な、親の安森源次兵衛、見忘れたか」と懷中より、骨桶出してさし擧る。踐まれながらに吉三郎、振仰向て「こは如何に、親父様は死なしやつたか」十「チ、サク。エ、問ふも語るも浦めしや。先月廿九日の夜、御切腹遊ばされた。忠義とは申ながら、御無念な御最期の、其中にてもおつしやるは、云置く事は外に無い、何卒倅吉三郎が、出家相續する様に、くれぐゝ十内頼むぞとて、家來に御手を合されし、お志のいとをしさが、骨に通つて有故に、お主を叩いた天罰も、踐んで奈落へ沈むのも、身共は何共思はぬ」と、其まゝ其處にこけ伏して、男泣こそ切なけれ。吉三郎は骨桶を、手に乗せて見つ膝に置、「エ、替果てたるお姿」と、咽入く消へかへる。十内や

恩にも三つ云々
—四恩とて天地
の恩、父母の恩
主の恩、師の恩

八逆罪—謀反、
謀大逆謀叛、惡
逆、不道、大不
敬、不孝、不義

がて起直り、骨桶を左手に持、怒れる顔も其様も、別れし親の物言にて、「ヤイ悴の吉三郎、源次兵衛が冥途から、汝に尋る事共を、云譯あらば返答せい。形は人に生れても、恩を知らぬは畜生よ。恩にも三つの品が有、差當つては親の恩、身を立子孫を養育する、お主の恩は猶重く、文字を習ひ目を開く、師匠の恩は取分て、大海よりも又深し。喩を以て云時は、親は子を憐めど、お主には見替へぬ事、主は家來を養へど、身に替へて最屑はせぬ。師匠の恩は目前に、汝が不義に替らんと、四十余年戒行の、譽も名をも顧ず、玉子酒を參るのを、のめくとして見て居る事、畜生と云はふか腰拔者と云はふか、八逆罪の科人奴よ。次に此源次兵衛、假に勘當せし事、某豫て若殿の、御爲に死ぬる覺悟故、流浪せんも不便なり、亡からん跡も訪はれたく、少しの事を云立に、出家にならぬ其内は、對面せじと此寺へ、追遣はせしは慈悲ならずや。其效もなく今日明日と、遁世を延すよし、内々人の知らせし故、末頼なき飢奴と、眞實の心になつて勘當はしたれ共、自然法師に成ならば、十内我に成替り、勘當も許して遣れ、骨に成共懷き、顔に對面致させよ、と頼みし手前も恥かしき、非義非道成性根にて、親の爲に奉公せう、武士に成のが孝行とは、よふもおのれは吐した」と、一度は怒り一度は又、打ち萎れたる

物ごしーをぶり
身を知る雨一涙
をいふ

すつばー盗賊
うごついてーや
ぐ／＼して

自分相應にー身
分相應に

いなにもあらず
ー最上川のぼれ
ば下る稲舟のい
なにはあらず此

物ごしに、それはと答ふ詞なく、身を知る雨やさめくと、泣いて俯き居たりけり。十内
涙押拭ひ、「親旦那の御意見が、篤とお耳に止まつたか。是からは又十内奴、推参を願
す、一言申上ます」と、飛退り手を突いて、「申吉三様、善と悪とは北南、足振變ゆる迄
の事。それ程の義はいはいでも、辨への有御發明、殊に短慮なお性質、家來の者に人中
で、蹈れた事の無念なと、定て遺恨におほすである。町人連の口先に、家一軒を見込
やの、いや盗人のすつばのと、云散されてきよりつと、うちついて居る人じやない
コレ、徒といふ大病に、勇も武略も拔けましたの。昨日迄も今日迄もの、千石取の御一子
と、あがめ育てし此方をば、雑言せられし其時は、舌切割いて捨てふか、と刀の柄に二
三度も、忍びに手をば懸けたれど、いや／＼自分相應に、大事の娘をおかされて、腹の
立が道理じやと、のめ／＼おきて十内も、腰拔に成つたぞや。家來の恥は此方の恥、お
前の恥は親御の恥、此世で不孝爲足らいで、又未來迄なさるゝか、欲心でない言分に、
さつぱりと隙やらしやれ。何うじやく、サア／＼／＼」とせはしなく、問詰められて
うろ／＼と、覺へず其處へ流す目に、お七は顔を振袖の、下から手にて物いはず、いな
にもあらず稲舟の、應ともえこそ云はれざる。十内二人が口なしの、色にぞいでのため

月ばかり（古今集）

いづの云々―出てに掛けて堰手は水を溜るものなればたまりかねと續けたり

たばふーかばふ

りかね、つかくと駈寄りて、「コレ吉三様、逆も此方の性根魂、臺を磨く此刀、某が手に掛けて、我も冥途のお供して、父御の前で拙者奴が、一分立る、御覺悟」と、氣相變へて見へければ、上人中へ押隔り、「主に諫めは家來の役、最前よりも宥免す、腑甲斐ない此法師と、末頼なふ侮りて、近比過言聞にくし。出家にも佛にも、爲すべき我が親切は、先にから目に見へぬか」と、氣色變れば十内も、吉三もはつと感涙の、首を下けて渴仰す。武兵衛や太左は何とやら、小むづかしさにこつそりと、立て行を十内は、後様に襟がみを、引摺み引戻し、「おのれ等最前親旦那を、横著者の非道のと、何者にか聞たるぞ、眞直に白狀せよ。改ていはね共、若殿様の御難義を、身に被りたる忠義とは、一國に隠ない、出放題成たは事を、よふもく吐出した。討て捨たい奴なれど、御出家なさるゝ悦びに、命計は助くる」と、右左へ取て投げ、起んとすれば踏倒し、逆る所を又蹴倒し、廿三十五六十、腰も背骨も立兼て、はうぐ廻て歸りしは、心地よく又可笑けれ。久兵衛夫婦も氣味悪く、そろく出る立關口、戀に泣子を引立て、母がくり事ねすり事、「はて何とせふもいやんな。菓物類なら何にても、たばふて虫は入るまいに、魚屋ならねば蛤の、口のあいたは是非ない」と、つぶやきてこそ立歸る。

中之卷

常磐かきは—永
久變らぬ
かちん云々餅
の暖かさを試み
る意か

水晶—推するに
かく

ひしはなびら—
ひしは災難

歌やよ柳、もとの梢の雪ならで、餅搗く宿の梅とのみ、冬籠する大根も、蕪も千代のも
ろかづら、常磐かきはの交譲木や、橙、柑子、榎、搗栗、昆布、串柿、商ひの、店を其儘蓬萊の、
八百屋萬の神の餅、御藏のかどみお難煮の、かちんあたよけ心見を、こよへ取このひつ
ちぎり、契はぐれて戀病の、娘お七は奥の間に、春をも待たず行年を、惜むでもなし世
の中は、無常と外へ見せかけを、色とは誰も水晶の、願ひの玉を手にかけて、題目繰つ
て居たりけり。中居の杉は差寄りて、「一年一度の餅搗に、小忌々しい何ぞいの。親御様
への意地張は、却つてお身のひしはなびら、移ろい易き人心、先方には忘れてござるや
ら、最早坊様になつてやら、知れぬ相手に義理立は、損な事や」と諫むれば、あて「聞え
ぬ事をいふ人かな。心の變る變らぬは、色品數多見盡して、濡の巧者の仇比。吉三様に
も我身にも、戀の手習血に染めし、起請の罪も有ぞかし。何しに仇に成るべき」と、し
やくり上たる顔形容、愛らしく又優しくも、重て返す詞なく、杉「有様云へばお道理」と、
最眞目にさへ持つ涙、洩れて袂を濡らしけり。臺所より親方は、「杉よく」と失聲、「お

泣子も目明一談

こしき一顧

ふどもねぜり！
奮も根芹もか

百夜通ひし少將
一深草の少將が
戀故百夜小町の
許に通ひし故事
浮思ひ一憂き思
ひ

のれは其處に何して居る。泣子も目明いて泣物ぞ。殊には今日の餅搗が、年寄た久兵衛や、婆が正月祝ふのか。類火に遇ふて諸道具も、足らぬ中から毎年の、佳例の通搗く餅に、小米一升減じぬは、生先の有お七じやと、子に絆さるゝ親の慈悲、近所鄰へ聞へては、驕な事と譏るである。一門共も笑ふである。其上に娘に迄、勘てもらふは是非がない。構はずと捨て置き。やがてこしきもしまいじやけな。男共は隙がない、兩替町のてうは殿、針立の立伯殿、お出なされと云て來い。あた面倒な」と喚かれて、笠も足駄も取敢へず、髪さへ今日は結ふ隙の、中戸口より咥いて、吹雪を凌ぐ前垂に、走出たる軒の下、ふどもねぜりも埋もれて、雪重けなる簀笠に、臥せる里の子哀やと、云捨過る裾を引、顔差出すは吉三郎、「ハッ」ト計に立戻り、杉こは淺ましき御有様、いか成事」と抱付、人目も分かず泣出す。吉三郎は押しづめ「何故ぞとは怨めしや、色故身をば寢す事、いか成高位高官の古へ今も同じ事。百夜通ひし少將の、雨夜の憂は知らね共、雪に身内は冷拔きて、顔見ぬ内に消ゆる身」と、泣音もいづれ弱氣なり。杉御尤々々。此方も同じ浮思、只今迄云出して、二人が泣て居りました。幸表に誰もなない。そろりと其處を這入て、潛を左へ五六間、行けばお部屋の縁の下、少時蹲んで居やしやんせ。

釘—冷たく

御宿者—町内の
取締

始末しがく—始
末才覺

お使つかひに行いて戻もどつたら、首尾しゆび見合みあて雪ゆきよりも、積つもる事共何方ぎちからも、云いひついはれつさせま
せふ。必かならずと叫さけきて、駈行かけゆく戀こひの道橋みちはしや、渡わたりに舟ふねの心地こころして、教おしへしまゝに這入はいり
て、土つちに此身うちまかを打任うちまかせ、釘くぎに成なつたる手足てあしをば、君きみが膚はだに打付うちつけて、寝ねもせぬ内に睦言むつごの、
心こころ企たくらむはかなけれ。かゝる折節せりふし町の年寄彌三右衛門としよりやそ、相客あひやく誘いひ入り来る。久兵衛夫婦きうべふふ悦よろこ
びて、「コレハく何いづれも様さま、珍めづしからぬ饗應もてなしに、却かへつて御苦勞ごくろうかけます。さあく—奥おくへ」
と手を取とれば、彌三右衛門やそ打笑うちわらひ、「如何いかにも参まゐる上うへからは、奥おくへも屋根やねへも通とほらふが、
序ついでながら御夫婦ごふふへ、願ねがひと云いふは武兵衛ぶへいの事。組中くみぢゆうと云いふ、平生へいぜいに、兄弟きやうだいよりも懇こんし中なか、俄にはか
に不中ふなかな様子やうすをば、聞きて去さりとは氣きの毒故どくゆゑ、どふぞ挨拶あいさつ致いたさふと、最前さいぜん武兵衛ぶへいに云いたれば、
ハテ久兵衛きうべいさへ合點がてんなら、身共みどもに別義べつぎござらぬと、結構けつこうな返答へんだふに、今宵こよひの祝義しうぎを幸さいはひ
に、跡あとからは見みゆる筈はず。押付おしつけがましい様やうなれど、萬事ばんじは我等われらが貰もらひます。御夫婦ごふふ頼たの
と云いひければ、久兵衛きうべい居直ゐなほりて、「御心遣おこころづかひと申まうさふか、御宿老殿ごしゆくろうどののお詞ことばを、背そむくは慮外りよぐわいに候けう
へ共、畏かしこつたと申まうされぬ、様子やうすは定さだめし何もの、お耳みみへも早入はやいづた筈はず。私類火わたくしるゐくわの砌みぎりには、
半櫃はんびつ一つ得退えのけずに、やうく寺てらにかくまはれ、二度お町ふたたびへ立歸たちかへる、始末しまつしがくもない
時節じせつ、彼かの武兵衛ぶへいが尋來たづねて、金二百兩きんにやうひび膝ひざに置おき、預あづかるでもない遣やるでもない、普請ふしんの用もちに

立てやる、手廻し自由に成迄は、二百年でも待つ金子、手形取にも及ばぬ、と投出されたる嬉しさに、思慮分別も要らばこそ、忝と戴いて、初の如くそこく迄、斯様に普請致せし事、一門よりも大切な、友達中と悦びしに、十四五日も以前の事、それ成太左殿挨拶にて、娘お七を所望と有、夫婦の者は猶以満足に存れど、いか成事か娘めが、ふつく嫌と云放すに、親子ながらも此事は、曲けて曲らぬ道理故、其段返事致たる、明の日よりも金子をば、戻せくと五度三度、毎日々々立せがみ、金子がなくなればお七をば、くれるか有無の返事をと、無體至極の使立。如何に貧成久兵衛とて、賣買にする娘じやと、見立てられたる無念さが、どふ堪忍が成物」と、聲打慄い腹立る。彌三右衛門領きて、「段々至極仕つた。武兵のが不届じや。そりや身共でも堪忍せぬ。然し斯ふした事も有、沙汰に及んだしはん坊、親の病氣に人參を、盛らぬ様成慾者が、二百兩と云銀をば、手形もなしに預たは、眞から底から息女をば、ほしいと思ふ餘の事。賣買にせぬ證據には、其節分も云出さねば、悔ると云物でもない。それに兎や角意地張れば、證文のない金子故、待て共いはれぬ義理。とあつて折角普請した、家を賣らすも笑止なり。此入分をとつくりと、云聞せたらお七にも、合點がなふて何とせふ。ひらにく」と物馴

肩骨が云々―骨
が折れると己れ
とかく
ちつくりあや
かり―少し似る
火の臓―脾の臓
にかく

に、云廻されて夫婦の者、兎角の應答云かねて、さし俯いて居る所へ、武兵衛はしろりとした顔で、つかくと伸上り、「何もお待ち久しかろ。横山殿會いませぬ、小栗が今宵の參會に、毒など盛つて給はるな」と、かさにかよつた云分を、むつとはすれど是非もなき、金に卷かるゝ苦笑ひ。乾の隅へいざくと、伴ひ奥に三重入にける。お七は巨燵に假寐の、夢何とやら魘はれて、ふつと起れば勝手には、三方土器束髮斗、母は銚子に蝶々の、折すへ付て忙しけに、持行奥の高笑。合點の行ぬと見る内に、でつちの彌作取肴、手に持ながらさし覗き、「コレお七様嬉しいか。嫌の應のと有とても、親と銀には肩骨が、おれもちつくりあやかりたい。吉三様の聞しやつたら、胸の火が燃ゆるである。燃ゆるつい手に御前程、火に縁の有お方はない。火事故寺で、徒し、火事故今度の嫁入し、火の臓強い男持、雲雀の様にならんしよ」と笑ひて走行にけり。お七は覺へず聲を上、「ナウ父様母様怨めしい。私が心にどの様な、行れぬ義理が有事やら、親子の中で問はれずば、人傳にても聞もせず、死ぬると言やといひはなす、事を好しなされかた。娘を獨捨るのか。余りに慘い心や」と、かつぱと轉び泣聲が、洩れて誘ふ縁の下、吉三は顔を差出せど、姿は流石隠れ簀、隠れ笠なら抱付て、聲をも立て泣たやと、足指してこそ居た

ぢぶん一時か

あどなきーあど
けなき
やうちんー永沈
地獄

りけれ。母は奥より走寄り、暫泣て云様は、「合點の悪い娘やな。此身も一度は若盛、ぢぶんに花もやつて来て、惚れた惚れぬのすべもしり、器量の好いと悪いのは、老の目にさへ見ゆる物。其方が皆尤故、嫌と云やるを無理にとは、今日迄いはぬ兩親が、慘いとはいはれまい。世が世の時で有ならば、假令其方が合點でも、あんな男を持たそふか。器量發明揃ふたる、聲と竝べて見よふ爲、分に過たる甘荷の、箆笥長持ゐり數を、恥かしからず取揃へ、かやは手織と急がしき、中に自ら機上て、織調し物迄も、類火に仇と成たるは、因果な男に焦付た、先性よりの奇縁じやと、思ひあきらめくれよかし。ならぬとならば此家を、銀の替に突出して、出て行分は構はぬが、親の難義を顧ず、思ふ人には添はれまひ。よし添ふとても出家をば、引落したる罪科は、閻魔の帳に付られて、火の車にて迎へられ、等活地獄の火の中へ、生ながら陥められて、煙の下に其人を、戀し床しと叫ぶ共、甲斐なきのみか夫迄、奈落の底へ墮すのが、何心中に成物」と、威しつ又は賺すにぞ、お七はあどなき心から、涙の顔を振上て、「暫しも君に添ふならば、此身は假令生ながら、火に入とても厭はぬが、いとしい人がやうちんへ、沈むと有ば悲しや」と、おろ／＼するに力を得、母は猶々口説立、「其方の返事次第にて、忽夫婦は袖

乞ひ、母は野の末山の奥、飢へ凍へて此世から、餓鬼道の苦を見するの、たつた一つの胸の内、孝行な子は佛神の、憐有て後々は、願ひの様に成物ぞ。世間の掟は夫をば、大事々々と教ゆれど、顔も心も憎體成、武兵衛に添ふは世界の義理。厭かるゝ様に身を、持なしや、何時去ておこすとも、忝しと請取て、其時こそは打晴れて、好いたお人に添はせてやる。親の難義に暫の、勤をすと思ふなら、吉三殿の目の前で、帶紐解いて寐るとても、徒とは思やるまい。合點がいたらあいといや。あいといや」とて撫摩り、「初心な心一つにて、胸の内が捌けまい。追付杉が戻つたら、母が無理か理か、談合して返事しや。我身は奥へ」と立ながら、心元なき親心、鋏剃刀櫛篋の、中を搜して持出る。お七は更に夢現、何か定めん中々に消へなば消へね玉の緒の、かよりとだにも其人に、知らせて後に死にたやと、障子一重を關の戸の、明くればやがて逢坂の、道共知らず泣盡す。吉三郎は羽脱け鳥、手も足もなき心地して、漸そつと蹠出、涙を囊に押拭ひ、つくぐと思案して、「母のつどくいはれしに、一つとして無理は無い。いや共おう共返答の、ないは道理じや理じや。必々怨みはせぬ。嫁入するも我々が、薄き契りも過去よりの、定まり事と知らずして、うかく、何しに來た事ぞ。親の命又師の目をば、く

ふつくと一決
して
にしくと一し
みくとか

重きが上の云々
—さらぬだに
もきが上の小夜
衣の歌をとる
わくせき—急忙
取なり—姿形

らまかしたる天罰の、忽ち當ると云事を、今といふ今身に覺えた。あら勿體なや恐ろし
や立歸て明日は、發心するぞふつくと、おれが事をば思やんな。此方には忘れ果た
るぞや。さはいへ今宵來たと云、事ばかりは知らせたい。納に顔がにしくと、見た
い事や」と這寄りて、障子覗けば我影の、若や勝手に見へんかと、そつと退いては又立
寄り、「杉は何とて戻らぬ」と、又さめくと歎きしが、「ハア是も亦誤つた。お七には早
武兵衛とて、親の許した男有、目を盗むは正眞の、間男も同前よ。叶はぬ事をくどく
と、よしない浮名濡衣の、重が上の小夜衣、何の簀笠いらぬ」とて、左や右に脱捨て、
涙の氷柱玉霰、袖を翳して出て行、かくとは如何でしら雪の、道踏分ける高足駄、杉は
心のわくせきと、行違ひたる取なりも、縁の薄さに見紛いて、内を覗けば夫婦共、勝手
に見へずよい首尾と、やがて立寄る縁の下、簀笠取て「是は扱。仲人は宵の程、最早、祭
が渡つた」と、障子明れば、お七やれお杉、悲しい事が出来たは」と、袂に縋りて泣出せ
ば、杉「イカニモくそふである。もふ何ほ程むつかつた。お脈見よふ」とじやれかゝる。
お七「エ、面白さふに何ぞいの。戀しき人に逢ふ事の、叶はぬ首尾になつた物。脈がよふ
てもおりや死ぬる、死なせてたも」とせき上る。杉「ハアどふやら拍子が違ふたが、まあ

彼の人に逢ふてかへ」も七ナニ彼の人とは誰ぞいの「杉」すりやまだ御存無いそふな。吉三様に逢いまして、此處に御坐れと教へたる、所に簀笠有ながら、お姿は見へませぬ。人が見付て去したか、但わしを待かねて、歸り給ふか氣遣な」と、其處よ此處よと尋ねれば、お七も共にうろ／＼と、彼方此方と見廻せど、其かひもなき簀笠に、ひし／＼と抱付、暫し消入歎きしが、やゝあつて云やうは、「いや／＼人が咎めたでも、其方が遅い故でもない。奥には今宵駕入の、はや盃の取結。母様最前此處へ來て、様々の御異見を、否とも應とも得言はずに、泣てばかり居た故に、それが心に障つてがな、お歸りあつた物である。間のない事じや追付て、呼まして來てたもらぬか。是なふ頼」と手を合す。杉は聞よりゑせ笑ひ、「何がそふした事じや物、歸らしやれいで何とせふ。親御で有ふが主様の、敕説にてもいやなれば、いやと云のが戀の意氣、朝晩泣てござつたは、人目威しの偽よ。そふとは知らで此事を、取持つ日からお兩人の、いか成御苦勞遊ばす共、何處迄も引添ふて、奉公せふと思ふたは、よしなき案じ過しを爲た 私も一所に水臭い、者と恨であらふ物。其中へは行かれまい。もふ今比はお頭が、圓ふがななつてある。お前は明日から筈に、結ふて嫁入の御稽古あれ。男は持たずせめてまあ、寢て花

我妻—我夫

あき—燈にあと
つた火

やろ」と立て行、冥途の坂の腰を押す、詞と後は悔しけれ。お七は内の者に迄、恥しめられてしほくと、「如何様私が悪かつた。ついいやくと云たらば、お嬉しそふな顔を見て、今比は寢て語らふに、どふ狼狽へて泣ては居た。そばからさへもあの様に、愛想盡せば其身には、嘸やお腹が立たである。云譯せふも佗びやうにも、最早お出は有まいし、文も届けてくれまいし、頼も綱も切れ果てた。あゝ懷しや戀しや」と、起て見居て見眺め遣り、移香残る簀を著て、笠も被つて此様に、悄然としたなりをして、此處にまつま待つ水鳥の、翼にあらぬ簀笠は、仇の形見よ取るもうし、脱ぎも遣られぬ袖の雨。著て見ては泣、捨ては泣、爰に歎けば座敷には、三國一と云はやす、お七聲とは憎や穢らはしや。それ故にこそ相思ふ、中をおのれに引裂かれた。我妻戻せ呼戻せ。さなくば寺へ連れて行け。出家落して生ながら、火へ陥つても大事な。逢ひたい見たい行たい」とウタイ形も亂れ氣も亂れ、亂心のおどなくも家が焼けたら寺へ行、又逢ふ事のあらふかと、ふつと付いたる出來心、そりりくと這寄りて、巨燵のおきを四ツ五ツ、簀に包み小袖にて、上を引卷きうろくと、慄上るや箱階子、三惡道の通ひ道、二階は地獄の這入口、鬼が攻來る身の因果、廻りくるくくるく、車長持戸棚の上、此處か其處

かと思廻して、ほいと投ぐるれば戀風に、我より先へ三重煙るらん。

下之卷

ごもく所―はき
だめ
傘字は穴冠りに
牛とかく

かうに木で―か
さにきるにかく
思ひ―重い
居られづ―居ら
れず

罪科のごもく所を傘といふ、文字は戀路の穴冠、繋ぐや牛のお七こそ、今日火あぶりと町々の役人夜番柴薪、歎きを此處に持運ぶ、煙はいづれ變らねど、哀はいと増さりけり。母は今日さへ傘の飯、持つ手も攪く足弱く、道も涙に見へね共、我手づからに煮焚せし、物と思はど暫くも、添ふ心地して嬉しかる、自らとても此碗を、手に觸れたりと聞ならば、それをお七と抱かゝへ、逢ふた心とたのしみに、漸傘屋に辿著き、門ほとほとと音づれて、「お七が飯」と云入る。番の者の聲として、「今日のお上の書付に、お七が養ひいらぬ筈、持て歸れ」と云聲も、權威をかうに木で鼻を、こくる下部も所柄、ぞつと身の毛も立戻る。向の方より久兵衛は、歎きに軽い思ひ共、いづれあやなし暫くも、宿に獨は居られづと、よろほひ來たる老の杖、久ヤア噺戻りやるか。ナントお七は機嫌よふ、物も喰ふたか進んだか。何ふじやく―尋れば、女房サレバイノ聞かつしやれ。あの内でさへ義理じゆんぎ、振廻でもあつたやら、今日はお飯が戻つた」と、いひも果

日親様云々鍋
冠とて足利義教
の爲に迫害を加
へられ焼きたる
鍋を頭に被らせ
しに法華經の功
力にて恙なかり
じと也
さもなかりさも
なれば
八歳の龍女一人
は成佛しがた
けれども八才龍
女成佛せし事法
華經に見えたり

ぬに久兵衛は、我を忘れて大聲も、「わつ」と叫びて伏轉ぶ。女房は取付て、「けたよまし
や何事ぞ。様子が早ふ聞たい」と、縄責むるぞやるせなき。久ハテ泣とて別の事じやな
い。可愛ひやつと思ふから、思はず知らずの落涙ぞ。さあ往にましょ」と包め共、女房「イ
ヤ此方の言葉の端、如何にとしても氣遣な。隠すも事による物」と、手を取つて引留れ
ば、久兵衛包むに力なく、「流石は其方は女の身、様子を知らぬは尤じや。總て牢舎と
云物は、殺さるゝ日は大法で、彼方よりも扶持が出る。お七が命も今日限り。あれ見や
其處な柴薪、わか木の花を生ながら、煙と爲すは胴慾」と、立寄つて杖振上、叩いつ泣
いつ現なき。母は餘に興覺めて、泣も泣かれずうろく」と、「頑是もなしに爲た事を、何
故お町衆はひたすらに、説事をして給はらぬ。代官様も了簡の、無い餘り胴慾や。頼
を掛けし日親様、法華經の功力にて、焼けたる鍋は空に飛び、お命恙なかりしとや。
夫婦の者が歳月に、袂の下で數へたる、お題目の力にて、若や焼けずに戻らふか。さも
なか母は何うせふぞ。八才の龍女様、雨車軸してたび給へ。國土の内に何時迄も、火と
云物のなかれかし。世界の人の恨にも、母には罰が當る共、娘一人が助からば、情なし
とは思ふまじ。三年四年前よりも、仲人が來て彼地此地と、似合の縁も有たれど、人手に

石に根繼の云々
―極めて大丈夫
なる事の噂

ぼう―訪法
子は三界の云々
―諺にて親は子
の爲に引かざる
る
月ならば二奴―
新月を價二奴の
饅頭といひかけ
たり
ひがいたすな―店
弱な

置が氣遣さに、入聲取て何時迄も、石に根繼の情あいが、過ての今の苦みを、よく見覺へて世の中の、娘持たる親御達、假令いか成徒をも、見遁にして置給へ。我身はこりて悔みても、歸らぬ事か浅ましや」と、大地にどうど打伏して、消ゆる計に見へにける。久兵衛はさし寄りて、「チ、理りじや去ながら、假初ならぬ科なれば、代官様のお慈悲にも、町衆の詫事も、叶はぬ事と初より、あきらめながらくどく」と、我も迷ふて朝晩に、法華の數珠をかけながら、愛宕様の方へ向き、娘が沈む火の難を、どふぞ救ふて給はれ、とほうくとは知りながら、頼し事の恥かしや。子は三界の首枷とて、現世未來を取外す、悲しき老のしまひや」と、同じく側に伏轉び、聲を立てぞ泣にける。斯る處へ人夫共、柱を擔けて口々に、「何と不便に思はぬか。誠譬に云通り、花ならば初櫻、月ならば二奴ど、饅頭のやうな手足をば、在所で團子焼く様に、火にくべるのは惜い事。それに相手の若衆奴は、何をしてけつかつて、今日が日迄に尋來ぬ。因果はお七獨じや」と、心なき身も哀知る、目を擦りてこそ通りけれ。夫婦は見上見下して、「世にひがいた娘をば、あの柱へ縛付、四方から焼立て、阿鼻焦熱の苦を、まじく見て居られふか。共に灰共成たやな。可愛の者や去とては、火を付す共どふぞ又、外に思案は出な

んだか。駈落かけおちするといふ術すべを、杉すぎは心も付つかずして、我われから身をこがや焦こがすらん。年寄としよりたりし我われ々が、身みは去年きょねんにも相果あひはてば、かゝる憂目うれめは見みまい物。今は死しなふも生いけふにも有あるにあられぬ世界せかいや」と、足手慄あしてふるはし目くるめき、性根しやうねなきこそ道理だうりなれ。所ところへ年寄彌としよりや三右衛門さんゑもん、涙なみだ片手なみだかたてに駈かけ來り、彌や「ア、悲かなうござる尤もつともじや。心一杯こころいっぱい訴訟そしやうもする。お上かみにもどふぞして、助たすけたふ思召おもひしめし、云譯いひわけの仕様しやうをば、くよめる様にの給たまへ共、年としの行ゆかぬ悲かなしさは、吉三きちさ様に逢あいたさに、火ひを付つけましたと有様ありやうに、云放いひはなせば是非ぜひもなく、法はふの如ごとくにお仕置しおきを、悔くやみても返かへらぬ事。それについて武兵衛ぶへゑ奴が、かふした中に取混とりまぜて、二百兩にひゃくりやうの金子きんすの儀ぎ、たつて御訴訟ごそしやう申まうせし故、委細ゐさいご御詮議ごせんぎ遊あそばされ、此事このことゆへに此度このたびの、科人さかじんも出來たりと、殊ことの外の御憎おにくしみ。只今ただいま窄うちこへ打込うちこまれ、右みぎの金子きんすは久兵衛きうべゑ、下くださるゝとの御上意ごじやういじや。せめてはそれを力ちからにして、歸かへらしやれい」と引立ひきたつれば、久兵衛きうべゑは手を合あせ、「金子きんすに念ねんはなけれ共、娘むすめを憂目うれめに沈しづめたる、元もとの起おこりの武兵衛ぶへゑ奴が、窄うちこへ入いつと聞きたれば、いづれ力ちからが付ついたやら、ちつと眼めが見みえます」と、悦よろこぶも亦また哀かななり、女房にようばうは聲こゑを上あげ「此吉三きちさめは如何いかなれば、お七おしちが最期さいご我々われが、歎なげを他處たそに見みつ知しらず、尋來たづねぬこそ怨うらしけれ。行方ゆくへも知しらぬ者もの迄も、口々くちくち云いて譏そるのが、耳みみへ入いらぬか聞きへぬか。娘むすめの敵胸かたきう欲よく者、

引れぬ足云々一
足と葦一節と一
夜とかく

情知らず」と泣惑ふ、久兵衛は押しづめ、「愚の事を云人かな。お七が爲に正眞の、敵といふはこち夫婦。學問立る家でもなし、武士の一門持もせず、讒な八百屋商ひして、娘が徒すればとて、さして恥にもならぬ事。お寺へいふて早速に、吉三を聲にもらふたら、今日のつらさは有まいに。小家一軒建てふとて、厭がる縁を結びし故、むごい死をばさするとて、最期に親を怨めふ物。千部萬部を讀んだりと、此方夫婦が弔は、露程も請まいが、戀しと思ふ吉三殿、一遍の題目も、草の蔭にて悦ばん。扱又此場へ見へぬのは、猶以の情ぞや。お七が吉三の顔を見れば、心亂れて生中に、臨終の迷ひと成、未來の程も不便なり。願ふた後生はなけれ共、見物群集の人々の、御回向の功德にて、佛にもなれかしと、思ふもせめて親の闇」あじき涙の諸聲に、他處の袂も濡にけり。はや刻限と相見へて、拔身の鍔のひらくくと、朝日眩く輝けば、夫婦は共に叫出し、人目も恥も警固をも、厭はずかまはず駈出すを、彌三衛門跡より取付て、諫賺して漸と、歸るや夢の浮橋を、娑婆と冥途の二道に、盡きぬ名残の袖の露、跡へ戻れば先へとて、引れぬ足の一よだに、泣くねや三重是を。

八百屋お七江戸櫻

つくと云々
涙を流すに上す
ひのへ馬一両午
玉の緒一玉と命
とかく
帚木一母に寄す
御げん一逢ふた
事
疊算一疊の目を
敷へて吉凶を占
ふ法
湯島に云々一當
時少女の顔を神
にあげて行末を
祈る風習あり

歌祭文呼子鳥の、哀れなるかなお七こそ、戀路の闇の暗黒に、よしなき事を仕出して、戀
の罪科我一人、かきあつめたる玉簾、あこがれ焦れ行末は、かよる憂身を此處彼處見付
見付に曝されて、日本橋より引かれ行。見る人袖を絞る人、見歸る人も皆人も、柳原
野のつくづくし、餘所目に餘る涙川、渡りかねたるひのへ馬、富士の江戸泉煙と諸共に、
消ゆる命ぞはかなけれ。首に懸けたる玉の緒の、絶へなば絶へね帚木の、形見の念珠繰
返す。守は父の給はりし、一部一卷後の世を、助け給へや南無妙法蓮華經、南無妙法蓮
華經、歌いつしか君と馴染み、變るまひぞや變らじと、起請を書いて取替し、小指を切
りて血を絞り、互に語る陸言に、祭文去りし御けんの夜の雨、殿御待つ間の疊算、逢ふ
夜逢はぬのよ、いさよ怨みても、外に惡所は誓文と、仇し男の仇事や、貧の盜に戀の歌、「三
十字一文字書習ひ、湯島にかけし松竹梅、本郷お七と記し置く、十一歳の筆の跡、見し
人あらば私の、形見と思ひ一遍の、御回向頼み奉る」と顔差入ると懷の、内より
洩るゝ振袖に、溜る涙ぞ哀なる。身は人くずといはど云へ、笑はど笑へ一筋に、思ひ初
めたる戀なれば、假令此身は貫かれ、骨は粉となれ灰となれ、魂は此世に留まりて、陰
に付添ひ身に移り、二世も三世も我夫と、手に手を取りて蓮華乗、説教法の纜切れば

竹の子云々―子
にかく以下八百
屋なれば青物に
かけていふ
めうが―若荷と
冥加
わかめ―和布と
若女
しめじ―示しと
しめじ茸
ずるき―隨喜と
芋莖

てよ、我と火に入夏の虫、焦れ死とは此事か。竹の子ゆへに迷ふ親、めうがも知らず恩知らず、如何にわかめといへばとて、氣儘に心持なして、あられ少なきしめじとは、神も佛もしらまゆみ、三つば四つばのよめがはぎ、脛も現に三田の郷、亂れし髪と諸共に、するきの涙おちこちの、祭文眺は此も鳩の海、小波寄する品川や、いよ、いよ、いよ、濱に入江の海人小舟、見へつ隠れつひとかすみの、彼からさきを見渡せば、吉原雀口々に、とがのよしあし夕時雨、戀の邪魔する男こそ、色の命をせたしどみ、我は佛になりもよし、ふりもよしなやよ、いさよ、戀故に、命の峠今暫し、暫しと留むる人もなく、心も駒も忙しけに、行道柴も露ぞうく。ひく足なみのうすづきて、此處ぞ名にふる鈴の森、最期場にこそ著きにけれ。かゝる所へ吉三郎、思ひ切たる白装束、群集の中を押分けく、人目も恥ぢずつかくと、立寄りんとしけれ共、警固の武士に隔てられ、泣音計の間替し、吉「我故斯る罪科は、淺ましの有様や。此身も共に」と焦れける。お七は顔を振上て、「愚にござる吉三様、我心から爲す業を、少しも悔む事ならず。逢ふて死ぬれば今ははや、心にかゝる事はなし。お前は命めでたふし、御出家なされ亡き跡を、よくく訪ふて下さんせ。いふ事とては是計。はやくお歸り遊ばせ」と、名残に心亂るれど、人目を恥ぢて

潔き、詞の中に曇行、目元に哀殘すらん。吉三も涙押隠し、「我身を庇ふ志、喜ばしや」と振歸り、役人に手を突いて、吉科の起の本人は、私にて御坐候。急いで彼をお助けなされ、我等を仕置下されよ」と、たつて申せど役人は、「おろかや一度代官所で、詮義極まる科人を、我計ひに叶はぬぞ。死なんず命をあの者が、望のごとく出家して、跡弔ひて得させよや。急ぎ立去れ。それ科人、時刻移る」と下知すれば、吉三も今は力なく、「生て居られぬ我命、いでく冥途の道連に、我先立て待べし」と、腹一文字に搔切て、露と消行露の世や、お七は今年十六才、吉三郎は十八の、花や月雪時鳥、汝も冥途の友となる。戀にはたして武藏野の、草の縁と色深き、浮名諸國にひろがりて、語り傳へる末の代に、哀は盡きぬ物語。

汝も冥途云々
時鳥を死田の田
をさといふより